

第5章

家族との関係からみる在日経験
日系ブラジル人の子どもの再適応

田 島 久 歳

家族との関係からみる在日経験 日系ブラジル人の子どもの再適応

城西国際大学

田島久歳

はじめに

滞日経験日系ブラジル人の子ども（以後、子どもと表記）のブラジルにおける学校社会・文化及び地域社会への再適応には、いくつかの要因によってちがいが見られる。

本章の目的は、次の前提条件を踏まえた作業仮説を設定し、そのちがいが生じる要因を論証することにある。この仮説の背景については本報告書の第1章において既に詳しく考察したので参照されたい。

①ブラジルは数多くの民族集団からなる社会であり、入移民の各民族集団は特定の地域に集住する傾向がある。②地域社会の歴史的形成過程が一樣でない。③歴史的に人口移動を繰り返し、移動する人々の「波」によって地域社会が重層構造的に形成されている。④以上の三点の要因によって、ブラジルには地域による家族構成や家族観の違いが顕著に見られる。⑤④の帰結として、地域ごとに異なる家族構成や家族観は、子どもの教育に対する取組みにも大きく影響する。⑥重要な社会的上昇手段として子どもの教育に尽力してきた日系人も例外ではなく、⑤の仮説が適用可能である。同仮説は日系人デカセギ者の場合にも適用可能である。

以上の前提条件のもとで本調査は次の作業仮説により調査地および調査対象者を選定し、調査方法を決定して、調査を実施した。

本章の作業仮説とは、子どもの学校文化・社会および地域社会への再適応には家族の形態が大きく作用するというものである。したがって、本章では調査対象者を家族形態ごとに分類して、子どもの再適応を考察する。

家族の形態は地域によってちがいがみられ、子どもの再適応状況を左右する要因と密接に関係しているが、地域ごとの家族形態のちがいについては既に第2章で述べたため、本章では詳述しない。

家族形態は次の3とおりに分類する

- 1 両親と一緒に、核家族で生活する子ども
- 2 核家族で片親と一緒に生活する子ども
- 3 片親と一緒に、または両親不在で、拡大家族で生活する子ども

本報告でいう核家族とは、家族を構成する成員である両親と子どもからなる形態と、近隣に親類縁者がいないか、いる場合でも交流がほとんどないため、自律した機能をもつ家族をさす。

これに対し、拡大家族とは、両親と子ども以外に、祖父母、あるいはいくつかの家族が同居する家族の場合と、家族形態は親と子どもからなる「核家族」でありながら、近隣に親類縁者がおり、かなりの頻度（少なくとも週末）で交流があり、相互に「家族」として補完関係にある家族をさす。

家族形態の地域差を論証するために選定した調査地は次のとおり。

筆者らが1991年に行った滞日日系人の就労や生活実態に関する調査によると、日系人デカセギ者はサン

パウロ大都市圏を中心に、サンパウロ州西部の地方都市をはじめとした州内の地方都市や、パラナ州北部出身者がほとんどであることが判明した¹⁾。マト・グロッソ州を含む中西部およびアマゾニア地域出身者はこれに続き、僅かではあるがリオ・デ・ジャネイロ州出身者が見受けられた。なお、その後の継続調査やフォロー・アップ調査によると、1998年時点においても日本に滞在するブラジル人の出身地の構成は大きく変化していなかった。したがって、それらの日系ブラジル人は、帰国する際、ブラジル国内のそれぞれの出身地に戻る者が多いと考えられる。当然のことながら、子どもを伴ったデカセギ経験者にも同様なことがいえると推察される。

このような状況を踏まえ、本調査において筆者および山脇は、滞日日系デカセギ者の多い出身地としてブラジル南東部地方のサンパウロ州西部、南部地方のパラナ州北部、アマゾニア地域のマト・グロッソ州、中西部地方の南マト・グロッソ州を調査地に選定した。

以下では1998年、1999年にインタビュー調査した20家族（親と子どもを合わせ40人強）の中から8事例を紹介し、考察する。

1. 両親と一緒に、核家族で生活する子ども

【事例 A】《1999年8月13日現在、祖母、父W.K.、母S.K.、叔父2人（内義理の叔父一人）、叔母1人をインタビュー》

マト・グロッソ州クイアバ市に住む非日系の父W.K.および日系二世の母S.K.と3人の子ども長男A.K.、次男B.K.、三男C.K.の家族。

この家族は、まず静岡県に行き、その後親類の多かった千葉県成田市三里塚に引っ越した。常に子どもと一緒にだったが、最後の1年間は、子どもたちをブラジルの親戚にあずけて妻と二人で滞日した。

現在は家族5人で中間層上の住居が多いクイアバ市サウダジ地区に居をかまえている。大きな家である。

子どもは3人とも、マト・グロッソ州立ボア・エスペランサ初等教育機関に通っている。現在A.K.は初等教育の6年生、B.K.は5年生、C.K.は4年生だが、A.K.は一学年遅れている²⁾。

A.K.はブラジルでは就学前年齢だったので幼稚園に通っていたが、来日してすぐ日本の小学校に入学した。B.K.とC.K.は人材斡旋会社の託児所で預かってもらっていたが、託児所閉鎖後は日本の保育園に入園した。子どもは3人とも日本の学校にすぐ慣れ、特に次男B.K.と三男C.K.は就学前年齢だったこともあり、極めて早く日本語を覚え、問題はなかった。A.K.も小学校で日本語を覚え、問題はなかった。

夜に親が仕事を終えて帰宅すると、子どもたちは日本人の友達のところまで遊んでいることがあった。日本人の友達は皆良くしてくれた。日本人の親も理解のある人たちでいろいろと助けてくれた。学校から来る知らせは近所の日本人の親に聞くことにしていた。親切に教えてくれた。

帰国後ブラジル社会への再適応の方が日本での適応より大変だった。

帰国したとき、A.K.は初等教育3年生の年齢だったが、一学年落として2年生から始めることになった。B.K.とC.K.は年齢相応の学年に入り、順調に再適応できた。

ポルトガル語は日本滞在中も家庭内で話していたので、大きな問題はなかった。現在は、勉強も順調に進んでいる。ただし、子どもたちはポルトガル語会話の文脈の中でポルトガル語語彙のわからない言葉の代わりに日本語の単語を入れて話す習慣がまだ続いている。事例Aの親戚のように、クイアバで付き合いのある親類縁者で滞日経験のある子どもが8人おり、皆週末に相互訪問しながら生活している。

子どもは学業と社会に上手く再適応している。

【事例 B】〈1999年8月20日現在、父、母、次男をインタビュー〉

南マト・グロッソ州カンボ・グランデ市に住む日系の父 T.d.K.、日系の母 L.N.K.、長男 A.K.、長女 B.K.、次男 Tk.K. は家族 5 人で滞日していた。

カンボ・グランデでは中間階層中の住民が多い地区に居を構えている。また自宅とは別に、父は市の中心部に自動車の冷房修理工場を開設するため準備中である。

まず 1990 年に父が一人で来日し、その後 1993 年に家族 4 人を呼び寄せた。来日当時 15 歳（ブラジルの中等教育 2 年退学）だった長男は仕事に就いた。14 歳（ブラジルの初等教育 8 年退学）だった長女は Supletivo CETEBAN（私立バンデイランテス通信補習課程制度）で初等教育を終了し、16 歳で人材派遣会社に就職した。日本では、茨城県水海道市に住んでいて、次男は水海道小学校に通学した。

【次男 Tk.K.】

来日時 5 歳だった次男は保育園に入園し、帰国時の 1998 年 12 月には 11 歳だった。

日本では親兄弟が仕事をしていてから次男は授業が終わると午後 5 時まで児童館で過ごしていた。児童館から帰宅すると、毎日決まって母からの電話を受けた。すぐその後、姉が帰宅して夕食を作り、7 時に夕食をとった。母は夜の 9 時に帰宅したので後で食べた。

親は次男が日本語を早く覚えるようにと家でも日本語を話すようにし、他のブラジル人の子どもと遊ばないようにもした。特に、保育園のときには意図的にそうした。

小学校の 3 年生からサッカーをやっていた。日本の学校には年に 3 回遠足があった。遠足は勉強ではなく、遊びだったのでとても楽しかった。

日本では相撲大会で 4 位になったことがあった。

帰国する直前に小学校の 4 年 4 組の担任の先生が Tk.K. のために思い出ファイル（クラス全員によるお別れ写真文集）を作ってくれた。日本の学校の先生方は親切だったので Tk.K. は学校が好きだった。

帰国する前の最後の一年間、小学校 4 年生のとき、近所のブラジル人女性に月曜日から土曜日まで 1 時間アルファベットによる識字化教育を受けてポルトガル語を教わった。

日本の学校の給食は大好きだった。日本の白いご飯が好きだったので、ブラジルのポロポロご飯（インデイカ米）はキライだ。

教科では、算数、図工、音楽が好きだった。音楽の授業ではピアノをやっていた。ブラジルでは初等教育 5 年から音楽の授業がないのは残念だ。

日本では一日中学校にいたが、ブラジルでは半日だけだ。また、日本の学校には掃除当番があり、給食もあったが、ブラジルには何れも無い。掃除がないのは良い。ブラジルには掃除する専門の人がいる。ただブラジルの学校のトイレはいつも汚く、トイレット・ペーパーもない。これはブラジル人にはエドゥカソン（educação 躾やマナーが悪い）がないからだと思っている。

日本では宿題を手伝ってくれない友だちとは喧嘩（絶交、無視）した。ブラジルではそのようなことはしない。友だち関係が違うからだ。

日本の成績表には先生がコメントを書くが、ブラジルでは点数しか書かない。

日本では兄が車を持っていてどこにも連れて言ってくれたが、ブラジルはどこへ行くにも遠くて不便だ。

ブラジルでは早くポルトガル語を覚えるようにするため次男が家でもポルトガル語を使うようにしている。Tk.K. はまだポルトガル語をうまく話せないので恥ずかしいと思っている。

ブラジルではカトリック教系の私立ドン・ボスコ初等・中等教育機関及び予備校（Colégio Dom Bosco）に通っている。親が学校の先生と相談した結果、家庭教師として働ける同校の教師はドン・ボスコ学校で

午後授業を行っているため、次男は午後1時から6時までには学校に通い、午前中は8時から11時までその先生に家庭教師をやってもらっている。

掛け算をするときは日本語で考え、ポルトガル語での暗算 (taboada) が良く暗記できない。その他のことも日本語で考え、日本語で反応する。例えばポルトガル語のアヂミル (admiro = 動詞 admirar < 感心する >) の直説法現在形の一人称単数 = 私は感心する) という言葉を聞くと、日本語の「味見る」とすぐに連想する。このようにポルトガル語は難しく、まだ不自由で、歴史や地理も難しい。

日本では、毎月1,000円の小遣いをらっていた。それは普通だった。ブラジルでは授業がある日は2リアル (1999年8月20日ごろのレートで約120円。月額約2,400円) もらっている。しかしブラジルの金持ちの同級生は一ヶ月100リアル (月額約6,000円) ももらっている。ブラジルには給食がないため、2リアルの小遣いは学校のカンチナ (cantina 校内に設置されている民間の売店) でホットドックとジュースを買って食べるためだ。

女の子はブラジルの方がお洒落でイヤリングもしているのも日本より良い。

ブラジルでは土、日にはプールに行ったり、出掛けたり、テレビを見たりして過ごしている。従兄弟が車で2、3分のところに住んでいるのでよく一緒に遊ぶこともある。また、土曜日の午後2時から3時まで初聖体拝受 (primeira comunhão) の準備として学校内の教会に通っている。

将来の夢は日本に行くことである。そのためにも日本語は忘れないようにしたいと考える。だから今でも日本語の漫画 (コロコロ・コミック) を読んでいる。明日 (1999年8月21日) 姉と兄が帰国するので新しいコロコロ・コミックを持って来るのを楽しみにしている。

【事例 C】《1999年8月25日現在、母、次女、長男、叔母、従兄弟をインタビュー》

南マト・グロッソ州カンボ・グランデ市に住む日系二世の母 L.M.M.M. は、非日系の夫との間に長女 Ts. (18歳)、次女 Tl. (15歳) と長男 Tg. (12歳) の子どもがおり、5人家族である。長女は日本で結婚し、現在も日本で働いている。次女と長男は近くにある新設の私立小・中学校に通っている。

カンボ・グランデの中間階層下の住民が多いヒタ・ヴィエイラ地区の新興住宅地に居をかまえている。1991年12月に日本ヘデカセギに行く前はロンドニア州に住んでいたが、カンボ・グランデには親兄弟がいたため、帰国後同市で家を購入し、定住を決めた。カンボ・グランデの住宅はプール付きの3区画 (lote) 分の土地に2階建ての大きな家である。

カンボ・グランデの住居には家族4人以外に、祖父 (祖母は山口県でデカセギ者として老人介護の仕事をしている)、妹とその2人の子どもが居候している。

1991年にまず名古屋行き、2ヶ月後には兄弟がいた東広島市に移った。その後一時帰国してから大阪の天王寺に行った。最終的には1997年に帰国し、通算5年ほど日本に滞在した。なかでも東広島市の生活が最も長かった。東広島市では親戚や日本人を問わず、多くがとても良い人で、お世話になった。それに対し、大阪での生活はよくなかった。8ヶ月過ごした間、学校や仕事での対応にも終始不満があった。

最初のデカセギ計画では2年間だけ滞日して帰国することになっていたが、日本で5年も過ごしてしまった。惰性でそれ以上長く滞在すると子どもたちがブラジルに再適応できなくなると思い、帰国を決断した。1996年に2ヶ月ほど一時帰国したときの経験が帰国を決意する大きな判断材料となった。当時は2ヶ月だけでもブラジルは大きく変化していたことに気付き、驚いた。だからこれ以上日本に滞在するとブラジルの現状がわからなくなると思った。

[次女 Tl.]

次女のTl.は、来日時の1991年には7歳だった。Tl.は日本の小学校1年に入り、帰国時の1997年（13歳）には小学校6年生を中退した。帰国後初等教育7年生に入学し、現在ブラジルでは近くの私立の中等教育1年生である。

日本の小学校では、他の日本人の同級生より勉強が出来たため、先生からも誉められた。教科では図工が好きで、算数は好きではなかった。

日本では、多くの友だちがおり、帰国後も日本に帰りたいと思っていた。日本の学校では、ブラジルとは違い、友だちはグループごとにかたまるが、Tl.は何れの集団とも仲良くやっていた。学校から帰宅した後は、単独あるいは友だちと自由に遊びにどこにでも行けた。大阪に住んでいたころはスケートに行ったり、大阪城に遊びに行ったりしていた。学校には歩いて通っていた。

日本では、ポルトガル語の読み物やビデオは否で拒否していた。日本でもブラジルのテレビ番組や漫画は手に入るが、それらは面白くないと思っていた。そのため日本の漫画やテレビ番組を見ていた。また、家庭では、日本語だけを使い、母親によれば、ポルトガル語で質問しても子どもたちは7割は日本語、2割はポルトガル語交じりの日本語、1割はポルトガル語で答えた。

日本の学校では女の子の友だちだけだったが、ブラジルで初めて男の子の友だちがたくさんできた。女の子の友だちはいるが、男の子の方が多い。

ブラジルでは初等教育機関の7年に入ったが、ポルトガル語で書くことさえほとんど出来なくなっていた。そこで初等教育1年のCA（ciclo de alfabetização）、つまり識字化課程を経る必要があった。その後、毎日部屋に閉じこもって一人で勉強し、学年相応の段階まで取り戻すことができた。しかし、CAを経ることで7年生を二回繰り返すかたちとなった。このため現在でも一学年遅れている。本当は中等教育2年生の年齢だ。このようなこともあり、最初は日本人生徒のいる日本語で授業をする学校に行きたいといっていた。

ブラジルでは算数も好きで、現在は学校の成績は全ての教科においてクラスのトップである。

ブラジルで一番驚いたのは、生徒が皆バスで通うか、親が車で送迎するところだ。日本では一人で学校に歩いて行った。Tl.はバスで通っている。また、ブラジルは治安が悪いこともあり、出掛けるときには必ず親が車で送迎する。このため不便で不自由を感じる。その点では日本の方が自由だ。ただ、ブラジルでは親による送迎や友達と出掛けるかたちで12歳、13歳の子どもが一人で夜外出して遅く帰ってくることに驚いた。

ブラジルの学校の勉強が一段落した1999年の3月ごろに、日本語を忘れないために日本語を勉強することを考え、四恩校（カンボ・グランデの日本語学校）の授業を見てみた。しかし、そこでは5年生ぐらいの本を使っていて、自分のレベルよりかなり低かったため勉強するのを断念した。とはいえ、将来は日本語とポルトガル語を使い、日本に行けるスチュワーデスになりたい。

[長男 Tg.]

1991年に来日した長男のTg.はまず保育園に通った。1997年に帰国したときは小学校の4年生だった。東広島市の小学校にはブラジル人児童生徒が3人いたが、数が少なかったこともあり学校ではポルトガル語の話せる先生を6ヶ月間付けてくれた。彼女は丁寧に個人的に指導してくれた。

日本滞在中にTg.は自分が外国人であることを忘れ、日本人だと思い込んでいたようだ。

1996年に一時帰国したとき、子どもたち、特に長男はブラジルは否だと言っていた。男の人たちが皆シャツを身に付けずに上半身裸で歩いているのには驚き、汚く感じた。町もゴミだらけで汚いと感じた。2ヶ月の一時帰国後、再び日本に行ったらTg.は小学校の作文で、まるで日本人がブラジルに旅行に行き、不思議

識な世界を体験したかのような内容を描いている。

1997年に小学校4年生だったTg.は、帰国後学年齢は5年生に相当するが、初等教育機関の先生の助言を受け4年からやり直した。とはいえ、長男はポルトガル語のアルファベットもわからなかったので半年間C Aを勉強した。ところが、初等教育の4年を終了するころにはクラスの他の児童生徒よりも成績が良く、唯一絵本を書いた子どもとなった。もちろん、ポルトガル語の綴りにはまだ問題があったので先生が添削してくれた。

Tg.は、日本での掛け算の方法を覚え、ブラジルの暗算 (taboada) は苦勞して学習した。ブラジルの先生方はブラジル式のやり方を押し付けることはせず、日本のやり方でも良いと言っている。

次女も長男も家庭教師は付けなかったが、良く勉強した。Tg.は、現在は午前中の学級に通っているが、帰国当初の最初の2ヶ月間は午前、午後の両学級に通っていた。その後、1年間は1年生、2年生、3年生の教科書を取り寄せて家で一人で勉強した。とはいえ、同年代の子どもに比べるとポルトガル語語彙はまだ少ない。

学校は日本の方が厳しかった。制服があり、バッジも付けないといけなかった。ブラジルの学校は自由で、制服といえばTシャツだけだ。

Tg.は日本では男の子の友だちだけだったが、ブラジルでは女の子の友だちが多い。もちろん、毎日のように家のプールに泳ぎに来る男の子の友だちもいる。

日本に比べブラジルの家は広く、プールもあり、友だちも大勢いるが、犬がいても強盗が家に忍び込むほど危ないことなどから（一人で出掛けられるような）自由がないと言って、最近まで日本に帰りたいと言っていたが、現在はブラジルの学校、社会に順応し、満足している。将来は何になりたいかまだ考えていない。

Tg.は帰国後4ヶ月ぐらいブラジルの食べ物が食べられなかった。ブラジルの主食のインデイカ米を食べられるようになったのは一年経ってからだった。最初はパイナップル、バナナといった果物だけを食べていた。

[解 説]

分類Iの事例A～Cは両親と一緒に子どもが生活する核家族である。ただし、両親以外に兄弟、祖父、祖母が同居している場合がある。

学習意欲や学力、学習の早さは個人の適性が大きく影響することもあり、それぞれの事例によって異なるものの、来日当時の日本の学校への適応は円滑に進み、帰国後に大きな問題に直面する傾向がみられる。とはいえ、両親が揃っている場合は、家族の支援を受けることによって学習支援のために様々なかたちのサポートが得られているようだ。例えば、事例Bの家庭教師や事例Cの姉弟のように家で勉強できる体制を整えることによって、学習、学校文化・社会に再適応できる環境整備がされている。そのため事例Bのように日本の学校が良いと思っていた子どもでも再適応が可能になっていく場合もみられる。

また、ブラジル社会への再適応が親にとっても子どもにとっても困難であることがわかる。その良い例が事例Bの非日系の父親のブラジル社会への再適応であり、彼は来日したときにはすぐ慣れたが、帰国後の方が再適応するのに2ヶ月以上要したと証言している。

大方のケースでは、子どもの学業への再適応において、1学年から2年学年を落として勉強しており、教科学習の遅れの大きさを如実に物語る。とはいえ、親、友人の支援はもとより、C Aや補習授業などの学校の支援を得て、再適応は順調に進んでいる。

帰国した後に困難を抱える教科は、宮島が指摘する歴史文化言語を学習しなければならない教科である(宮島 1999:146,147. 志水 1999:9) 3)。歴史文化言語とは数学のような抽象的学習言語を使う教科とはちがいが、ブラジルの歴史的、文化的コンテクストを共有していなければならないブラジル史、ブラジルの地理、ポルトガル語の教科で使われる言葉である。帰国した子どもの家庭教師はこれらの教科を教える場合が多い。とくに、歴史や地理は、その教科を学習する手段としてのポルトガル語が十分できないと学習は困難を極め、これを克服する目的でポルトガル語の文法解析、綴り、作文を学習する子どもが目立つ。この点は全ての事例(A~H)に共通する問題である。

事例A~Cの家族形態で来日し、帰国した子どもは、日常生活においても親の躰と愛情を十分注がれ、家庭内教育においては両親の積極的な参加が見られ、学校教育においても家庭に心理的安心感とサポートがあるため、順調に再適応し、地域社会にも問題なく順応している。たとえばブラジルの経済階級差や習慣の違いを学校または地域社会で体験した事例Bの子どもの場合でも、初期のころ学校や社会への再適応が難しく日本に帰ることを望んでいた事例Cの姉弟二人の場合でも、家族のサポートによりブラジル社会や学校への再適応を達成できた。

社会への再適応とは、社会の規範やモラルといった新価値体系の習得を意味する。例えば、衣服にまつわる価値規範やモラル(事例Cの長男)、異なる食習慣の再獲得(事例C)、住居や家庭の新しい機能の学習などがある。住居や家庭の機能の日本とブラジルのちがいは、日本では帰宅するとテレビを見たり、ゲームをしたり、あるいは友人の家に行くなど、家族を結びつける家の役割は希薄である。これに対し、ブラジルでは学校の授業は半日であることもあろうが、四六時中ほとんど自宅で一日を過ごす。住居および家庭は単に家族が衣食住をともにするというだけでなく、友人や親戚を招いた社交活動の場でもあり、社会生活全般の最も重要な場として位置づけられる(事例B,Cの長男)。その他にも、外出には親の送迎を要するといった生活様式の変化をいかに受け入れていくかという問題が社会への再適応上決定的な点といえよう(事例Cの次女)。さらには、子どもたちの社会生活上大きな意味をもつ友人関係のあり方の日本とブラジルのちがいを理解して新しい環境で友人をつくれるかどうかは再適応への重要な鍵となるだろう。具体的には事例Cの次女および長男の場合を挙げることができる。彼らは日本では同性の友人が多かったのに対し、ブラジルでは異性の友だちが多く、友人関係の性差が大きく変化している。

2. 核家族で片親と一緒に生活する子ども

【事例D】《1999年8月23日および24日現在、母、次男、三男、叔母をインタビュー》

南マト・グロッソ州カンボ・グランデ市の非日系の父は現在アカセギ者として来日している。日系二世の母E.S.S.M.は、次男P.H.S.M.(16歳)と三男J.C.S.M.(10歳)の3人でカンボ・グランデに住んでいる。長男A.S.M.(24歳)は日本滞在中にクイアバ出身の日系女性と結婚して日本で働いている。母のE.S.S.M.は現在家でエスカルゴを養殖し、子どもたちがその手伝いをしている。カンボ・グランデ市の中間階層下の住民が多い地区に家を購入して住んでいる。

初来日は1991年にさかのぼり、長男、次男、三男と両親の5人で来日した。その後結婚した長男と父を日本に残し、残りの家族3人は1998年に帰国した。父は、1999年1月に帰国したが、4月に再び来日し、現在はアカセギ者として日本で働いている。

日本滞在中は、子どもたち同士では日本語のみで話し、親同士はポルトガル語を使用していた。親と子どもの会話のときは、親はポルトガル語と片言の日本語、子どもは日本語で会話をしていた。

1991年の初来日当時、子どもたちは、次男が8歳、三男が2歳だった。帰国した1998年にはそれぞれ15

歳、9歳だった。

[三男 J.C.S.M. および次男 P.H.S.M.]

ブラジルに帰国後、子どもたちは私立のカトリック教系進学校ドン・ボスコ初等・中等教育機関及び予備校 (Colégio Dom Bosco) に入学し、次男は現在も学業をつづけているものの、三男は退学した。次男は勉強を止めて日本に行き、父と一緒に働きたいと言っている。

三男は2歳で来日し、9歳 (日本の小学校4年生) のときに帰国した。帰国後、ドン・ボスコ校の5年に入学したが、学校に馴染めず、数ヶ月で中退した。つまり、授業についていけないだけでなく、ポルトガル語ができないため友だちもできなかったのが最大の理由のようだ。J.C.S.M.はポルトガル語の聞き取りは多少できたが、全く話せなかった。母は先生と相談して退学させた。三男は現在、月曜日から金曜日まで、午後3時から5時まで家庭教師をつけて勉強している。勉強の中心はポルトガル語である。つまり、CAから単語、文法や作文である。

家庭でも兄弟同士では日本語のみを話す。次男は三男のためにと考え、日本語を使わないように努力しているが、三男は日本語で話すためそれにつられて日本語で会話をしてしまう。しかも、三男には友だちがいないのに対し、次男は友だちが多く、毎日サッカーや遊びに出掛け、三男を連れていってくれないので、三男は欲求不満を感じているようだ。学校に通っていない三男は家で一日の大半を母と一緒に過ごす。三男は家では母の手伝い、主にエスカルゴの世話かテレビ・ゲームをやる。しかし兄は新しいゲームを教えてくれない。

三男は、ブラジル人は (学校では) 卑怯でわがままだと考えている。日本人の方が友だちになりやすいと考えている。日本の小学校では科学クラブに所属し、勉強も沢山あり、友だちも大勢いたので楽しかったようだ。これに対し、ブラジルでは同年代の子どもの友だちをつくるのは難しいと感じている。

次男によると、ブラジルでは父親が不在のため母親は一人であるためイライラしている。彼は父が居たころの方が母はもっと穏やかだったと感じている。

三男によると、父親が不在のため家庭内の喧嘩がとまらない。彼は父が早く帰国してくれることを希望している。さらに、母親は一人で寝るのが恐いので三男と一緒に寝る。

三男は、イライラしている母と一日の大変を過ごす。そのためか、彼は人形を殺す夢や溺れる夢をよく見るという。またブラジルにはヘンな虫が多いという。三男によると、早くポルトガル語を覚えないといけないため、母親が日本の漫画 (コロコロ・コミック) を取り上げたと言う。

三男は、現在飼っているメス犬に小犬を生まれ、高く売りたいと言っている。父がいない分、母は三男に家の経済状況を話し、自分の抱えている不安定な精神状態を伝えているためか、10歳の幼い子どもに精神的な不安を与えているように思われる。

次男は由緒あるドン・ボスコ校に通っているが、勉強に集中しておらず、今年は補習授業を受けて再試験を受ける必要がある。母親は生徒教育担当教諭 (orientador educacional) に呼び出され、次男は授業中に私語が多く、勉強に熱心でないことを告げられ、注意された。

三男は、学校教育、社会のいずれに対しても不適應をおこしている。

次男は、学業上は不適應を起こし、地域社会に対しては一定程度再適應している。

【事例 E】《1998年8月23日、1999年8月17日現在、母親、長男をインタビュー》

パラナ州ロンドリナ市の中間階層下の住民が多い住宅地にある地区に居をかまえる非日系の母A.O.は、長女C.O.、長男F.A.O.の3人に加え、非日系の内縁の夫がいる。

以前は日系の夫を含め、4人家族でデカセギ者として滞日していた。その後、帰国したが、夫は単身で再び来日し、現在はほとんど連絡がない。妻 A.O. は日系の夫に愛人ができたのではないかと疑っていた。

1998年の調査時点では家族3人でロンドリナに住んでいたが、1999年にはA.O.に非日系の内縁の夫ができて、それまで精神的に不安定だった彼女も比較的落ち着いている。

A.O.の長女C.O.は現在16歳である。1998年時点では、C.O.は精神的に落ち着きがなかったが、その後祈祷師(母はbaiana バイアナと表現しているが、この名称はブラジル南部で北東部出身者の総称として使用する用語)に祈祷を行ってもらった結果、悪霊が取り除かれたように良くなり、現在は落ち着きを取り戻している。長男のF.A.O.は2歳で来日し、5歳で帰国した。帰国後、保育園に通っていた。その後幼稚園に通い、そして初等教育機関に入学した。現在は10歳で市立モアシル・テイシェイラ就学前及び初等教育機関(Escola Municipal "Professor Moacyr Teixeira", ensino de pré-escola e 1º grau)の4年生である。最近まで学校にも社会にも馴染まず、心理カウンセラーのセラピーを受ける必要があったが、現在は落ち着いてきた。〈事例Eは中川文雄による聞き取り調査に基づく〉

ブラジルに帰国当初は、親は社会的不適応、子どもたちは社会的および学校文化・社会への不適応をおこしていたようだ。それには、家族形態の再編成が大きく影響しているように考えられる。

[解説]

分類2の事例D～Eは、片親が不在のため、子どもと一緒にブラジルで生活する一方の親は、精神的に不安定になるケースが見られ、子どもの教育や社会生活への再適応における保護者としての役割を十分果たしえない。

事例Dの三男は、事例Cの条件と類似しているものの、学校への不適応や社会への不適応をおこしている点是对照的である。このような不適応を解決するのに大きな役割を果たすべき親が不在の例としては、典型的なケースといえる。事例Dの次男も家計を支えるために就労する必要性を痛感するがためにその挟間で心境が揺らぎ、学業に集中できず、精神的に不安定になり、学業面での不適応を起こしているともできる。

事例Eは上記事例Dを一層深刻にしたケースといえる。姉弟揃って学業や社会に対して、不適応を起こしている。ただし、一方の親の援助によって霊媒師に頼りながらも徐々に状況は改善されつつある。

帰国デカセギ者およびその子どもの精神的ケアを行っているサンパウロ在住の心理学者キョウコ・ナカガワとデシオ・ナカガワによると、分類2の中で最も深刻な学校不適応、社会的不適応を起こす子どもは、両親が不在で核家族的な機能をもつ祖父母のみの家庭で生活する者であると指摘している(1998年9月1日現在の面接)。

3. 片親と一緒に、または両親不在で、拡大家族で生活する子ども

【事例 F】《1999年8月13日現在、叔父3人、叔母3人、祖父、祖母、従兄弟をインタビュー》

マト・グロッソ州クイアバ市の非日系の男性W.K.は姪D.A.と甥E.A.を預かっている。彼らは二世の妻S.K.の兄弟、つまり義理の兄の子どもたちである。彼らの両親はデカセギ者として来日しているの、しばらくはW.K.のところに居候する。

D.A.及びE.A.の両親はブラジルを不在にして子どもたちを残している責任感からなのだろうが、頻繁にいろいろな物を送っている。また養育費、授業料も送金している。

両兄弟は進学校の私立マステル初等・中等教育及び予備校(Colégio Master)に通学している。日本に行

く前はカトリック教系進学校コラソン・デ・ジェズス初等・中等教育機関 (Colégio Coração de Jesus) に通っていた。

現在16歳になる姪のD.A.は中等教育1年生(9年生に相当)、14歳の甥のE.A.は初等教育7年生だが、D.A.は日本に行ったため一学年遅れている。

彼らは、日本に一年弱滞在中は岐阜県にあるブラジル人学校 (Brazilian School de Gifu) に通っていたが、ブラジルの同級生に遅れをとっていると常々感じており、帰国を強く希望していた。両兄弟は、W.K.の家族が帰国する際に一緒に帰って来た。どうも日本が好きになれなかったようだ。

ブラジルでは二人とも良く勉強している。クイアバ市内には親戚は多い。当然親戚の子どもも多く、週末になると親戚の家を訪問して過ごす。

両兄弟は学業、学校文化・社会や地域社会に再適応している。

【事例 G】《1998年8月18日及び1999年8月14日現在、F.Y.M.と友人R.S.をインタビュー》

マト・グロッソ州クイアバ市在住のF.Y.M.は日系二世で、現在クイアバの祖母の家族のところで居候している。

F.Y.M.は、両親と妹、弟と一緒にブラジル南部地方のサンタ・カタリナ州フロリアノポリスから来日したが、ブラジルでの勉強を強く希望し、一人で帰国した。

F.Y.M.は12歳から16歳まで日本に滞在した。ブラジルの小・中学校後期課程の5年のときに来日した。日本語が全然わからなかったことから2年遅れて小学校5年に入学した(当時は日本の中学校1年に相当する年齢だった)。中学校の2年生(16歳)になったときに、どうしても大学に進学したいと思ったが、日本では困難だという実感がわいてきた。そこでブラジルで進学することを考えた。しかし、一人だけの帰国を許さなかった両親を説得する必要がある。結局両親にはクイアバの祖母を訪れるために一時帰国するという名目をたてて帰ってきた。そのとき、母と妹も一緒に来たが、中学生の妹は日本に帰ることを選択した。

帰国後、ブラジルでは私立の進学校マステル初等・中等及び予備校 (Colégio Master) の中等教育1年(9年次)に入学し、1998年度に卒業し、20歳になった1999年度からは国立マト・グロッソ大学の物理学部の1年次生となった。帰国当初は、同年代と比べるとポルトガル語の会話力もかなり低下しており、わからないことが多かった。また人文・社会系の教科の勉強も遅れていたため猛勉強して追いついたが、来日前ブラジルの学校においても、日本滞在中の日本の学校でも、帰国後のブラジルの学校でも物理や数学といった理科系の科目は得意だったので、その分野は日本でもブラジルでも問題はなかった。

日本の小学生は、仲間意識や連帯感があり、中学生は人間関係が「つめたく」、ほとんど日本人の友だちはできず、一緒にサッカーをする程度だった。イジメの問題などはなかった。

日本の小、中学校では、先生方は生徒の面倒をよく見るが、帰国後のブラジルでは、先生はただ教科を教えるだけで、生徒が勉強しようがいが、生徒個人の責任であると考え、「つめたく」感じるが、自分は無我夢中に勉強した。

現在は、仕事をしながら夜間大学に通っている。以前から日系経営者の板金工場及び自動車販売代理店(同社の所有者はF.Y.M.の親戚である)で働いている。将来は日本に留学したい。

クイアバには親戚や日系の友人も多い。非日系のブラジル人との付き合いは少ない。友だちは男女を問わないが、日系の方が良いと思う。1997年から日系三世のガール・フレンドがいる。

彼は学業、学校文化・社会と地域社会に上手く再適応している。

【事例 H】《1999年8月25日現在、母親、長男 R.M.S.、叔母、従兄弟2人をインタビュー》

南マト・グロッソ州カンボ・グランデ市在住の日系二世 Y.M.S. は、非日系の夫との間に長男 R.M.S. と赤ん坊の4人家族だが、夫は現在デカセギ者として来日しており、カンボ・グランデには3人で生活している。とはいえ、自宅は他人に貸与しているため現在は3人とも姉の L.M.M.M. の家で居候している。カンボ・グランデにいる姉の家族は、非日系の夫、子ども3人（長女 Ts.、次女 Tl.、長男 Tg.）の4人からなる。Y.M.S. の家族は姉の家族同様、かつては広島県東広島市に住んだ経験がある。姉の家族は前述の事例 C である。

Y.M.S. の息子の R.M.S. は、1歳で来日し、保育園のときに一時帰国した。そのとき半年間ほどブラジルの就学前教育（日本の幼稚園に相当）を受けて、再び来日した。日本では小学校の1年に入学し、2年のときに再帰国した。

日本の保育園や小学校では問題はなかった。日本でもブラジルでも家族の周囲には親戚がいたので、生活面に関しても問題はなかった。

ブラジルにおいても日本滞在中も R.M.S. は家庭ではポルトガル語を使っており、しかもビデオでブラジルのアニメや番組を見ていたので帰国後ポルトガル語の会話には問題はなかった。ただし、文法的な統辞法の問題は多少あり、その克服のために4ヶ月間はよく勉強した。ブラジルでは、近くの私立の初等教育機関で午前中の学級で勉強し、午後は一年間家庭教師をつけて勉強した。帰国したとき初等教育2年に入った。現在は従兄弟の Tg. と同じ12歳である。再帰国した当初、母親は子どもを日系人の子どもが多い、カンボ・グランデで教育レベルの最も高い学校の一つと言われるヴィスコンデ・デ・カイル（Visconde de Cairú）就学前教育及び初等教育機関（同校は前期課程のみ）に編入させたかったようだ。しかし、同校で就学前教育を受けていない子どもは初等教育機関に編入できないといわれて断られた。

R.M.S. はカレーライスなどの日本食が好きだ。また、彼は学校でも地域でも女友だちより男友だちの方が多い。将来の夢はまだわからない。

全般に学校文化・社会や地域社会に再適応しているといえる。

【解説】

分類3の事例 F～H は、分類1と類似している。片親不在の事例は H のケースであるが、母親と一緒に拡大家族的な機能を果たす親類のところで生活しているため、子どもは順調に学校や社会に適応している。また、事例 F、G は両親不在ではあるものの、祖父母以外に、子どもの教育に積極的に責任を果たせる叔父や他の親類が同居している。

結局、学校文化・社会への再適応の問題は、ブラジル社会への再適応問題全体の一側面であり、地域社会といったホスト社会への再適応は、家族のサポートの存在が前提条件となり、学校がこれを補完することではじめて功を奏することが A～H の事例から明らかである。言い換えれば、子どもの教育や社会への再適応に積極的に責任の果たせる、したがって積極的にサポートできる親がいない事例 D～E の場合は、学校や社会への再適応が困難を極めることを意味する。

おわりに

最後になったが、本調査でインタビューした親は、事例 A～H のいずれも小・中学校か高等学校教育を受けており、大学教育を受けた者はいない。こうした意味での事例のかたよりがあることを指摘しておく必要がある。

また、親や子どもへのインタビューからわかったことで、ここで指摘すべき問題点として帰国前の日本における親は、日本の教育や日本での生活についての情報が決定的に不足していることを挙げなければならない。ほとんどの親は、日本の義務教育の理念や教育制度、教育内容についての情報がないし、それを知る術もっていない。親の日本での教育に関する一般的認識は次のようなものといえる。「日本は世界的にも高いレベルの教育を受けさせる国なのだから、子どもを学校に通わせておけば自然に相当の学力をつけることができる」という認識である。しかし、これは日本の教育現実を正確に把握したものでないことは明らかである。つまり、日本の小・中学校の義務教育においては、情操教育を含めた全人的な教育、換言すると人格形成や社会生活をも含めた教育を行うところが学校であるという前提に立っている。これとは対照的に、ブラジルの義務教育は教科教育が中心であり、個人の人格形成や社会化は家族の責任だとされるシステムとなっている。このように日本とブラジルとは教育理念が決定的に異なる点を親に理解してもらう必要がある。日本では、教科の学習は学校だけでなく、塾や家庭教師をとおして行っているという実情を知らせる必要がある。さもなければ、日本の学校への適応もうまくいかない可能性が高いし、何よりも子どもが学力をつけられないという問題を放置することになろう。それは、帰国後のブラジルでの学校への適応を左右する重大な問題にもなる。子どもの教育環境に関して親が十分な情報を持っているかどうかによって親の教育方針が決まる。これが子どもの将来に大きな影響を及ぼすことを考えると、改めて親に対する「教育」こそが必要なのではないかと思われる。

注：

- 1) 中川文雄・田島久歳・フアン春男・稲嶺・河口和也・山脇千賀子 他「日系人本邦就労実態調査報告書」『外国人定住問題資料集成』（駒井洋 編）明石書店 1995 年。
- 2) ブラジルの教育制度については西井が第 3 章で既に触れている。なお、詳細に関しては「[資料]ブラジル連邦共和国の教育基本法」『帝京法学』（第 21 巻、第 1 号、平成 11 年 3 月、江原裕美・田島久歳訳）を参照されたい。
- 3) 宮島喬『文化と不平等 社会学的アプローチ』（有斐閣 1999 年 2 月）。また、志水宏吉（研究代表者）『ニューカマーの子どもたちに対する教育支援の研究 - 大都市圏におけるフィールド調査から -』（平成 9 年度～10 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書 1999 年 10 月）を参照されたい。